

K14b Ia型超新星 SN2006X の BVRI 測光分光観測

山中 雅之、定金 晃三、田中 謙一、鎌田 麻里、西山 晋史、石井優子、住友 那緒子、溝口 小扶里 (大阪教育大学)、内藤博之 (西はりま天文台)

Ia型超新星は連星系における白色矮星への質量降着により、チャンドラセカール限界質量近くで爆発を起こす。このため、その明るさが一定で、宇宙論的な距離指標となりうる。SN2006Xは、2006年2月9日に渦巻銀河 M100 で発見され、21日ごろ極大光度となった、我々は大阪教育大学 51cm 反射望遠鏡により VRI バンドで 21 夜、西はりま天文台 60cm 反射望遠鏡により BVRI バンドで 14 夜、観測を行った。M100 は Freedman(2001) によって、ハッブル宇宙望遠鏡を使ってセファイド型変光星で距離が決定されている。母銀河による赤化を受けていない超新星が $B-V=0$ だと仮定し、天の川銀河の減光則を ($R=3.1$) を用いると、V バンドにおける極大等級が -21.6 等となり標準的な Ia 型超新星に比べ非常に明るい。しかし、観測されたスペクトルは標準的なタイプを示す。これは、母銀河による極めて大きな赤化を示唆する。本研究では、SN2006X の光度曲線とともに分光の観測結果を報告する。